

王 伝統の手技

第六回

高村精一さんの作る自転車は、丁寧な採寸で乗り心地がいい。いわば、身体の一部となった「着心地のよい洋服」ならぬ自転車なのだ。

自転車をつくるときは、必ず乗り手の使用目的を聞き、個人の身体にあわせたフレームの形状を把握してから、つくりに入る。その工程は数えたことがない、というくらい細分されている。

欲しいフレームがある
しかし、つくれないとメーカーがいう
では、自分でつくろう



西武池袋線の桜台駅から、バス通りを抜け、住宅街に入ると突然、店先に競技用の自転車がズラリと並ぶ自転車店が現れる。「どうも、高村です。すぐ分かりましたか？」

『RAVANELLO』（ラバネロ）と記された店内に入ると、ブルーのTシャツにジーンズ姿の高村精一さんが、日焼けした顔をほころばせながら、出迎えてくれた。

ラバネロは高村さんが作るオリジナル自転車のブランド名。イタリア語で「大根」を意味する。高村さんがこの場所で「プロシヨップ・タカムラ製作所」を開業したのは1974年のこと。以来36年にわたって、オーダーメイドで自転車を作り続け

「身長が同じでも、手の長さや胸の長さは人それぞれ違うでしょう。だから身体を自転車に合わせれば当然、乗り心地は悪くなる。そのためには採寸が重要になってくるんです」

高村さんは、ユーザーから注文を受けると、使用目的を聞きながら、まるで洋服の仕立てをするかのように、丁寧に採寸しながらフレームの形状や自転車のタイプ、さらには各部分の仕様を決めていく。

「さつ、またいでみて下さい！」高村さんの勧めにしたがって、採寸用の自転車のペダルを踏んでみると、まるで身体が自転車と一体化したような不思議な感覚を覚えた。

「ねっ、軽いでしょ。身体に合ったサイズで正しい乗り方をすれば、身体に負担をかけることなく、必ず速くなります。それが

できた。

「元々父親がここで、精密機械加工の仕事をしていて、僕も大学を出た後、しばらく手伝っていたんです。ところが、石油ショックで経営が上手くいかなかったため、で、とりあえず、食うために」と始めたのが自転車屋だったんです」

中学時代にサイクリングと出会い、高校で本格的に競技に参加するようになった高村さんは高校・大学を通して国体に7回出場。スプリンターとして、その名を轟かせる選手だった。だが、「自転車はあくまで楽しむもの」という思いから、競技者の道に進むことはなかった。そして、その原点にあったのが子供の頃から大好きだった「機械い

採寸が終わり、フレームの素材（カーボン、クロモリ、アルミなど）や、コンポーネント（ギア、クランク、チェーン、ペダルほか、使用する部品）などが決まると、いよいよ世界で一台のオリジナル自転車作りがはじまる。作業場は、シヨップの隣にあるこぢんまりとした工房だ。バーナーやグラインダー、そして手製の工具が所狭しと並ぶこの工房で、高村さんは一日の大半を過ごす。

「店を始めた頃、採寸したフレームをメーカーにオーダーすると、出来ません」といわれてね。当時、自転車は大手メーカーが大量生産していて、フレームにも特定の角度があって、74度だと74度のフレームしか出来ない」とみんなが思い込んでいたんですね。でも、僕、機械屋のせがれだから、出来ないと思ったら、自分で作っちゃえって」

それが、すべての始まりだった。以来、高村さんは持ち前の「機械いしり」精神を存分に発揮。それが自転車の既存概念にとらわれない自由な発想へと繋がっ



①採寸



②ソフト解析



③溶接



④曲げ



右上／年季のはいった機械。よく見ると「東京市」の表示が。右下／手作りの工具類が、ぎっしりと収められたトランク。中央／優勝カップの数々。左上／RAVANELLOと書かれたフレームが所狭しと天井から吊るされている。左下／作業場の裏にある練習所。夕方になると子供たちが集まってくる。

工具や治具も 手作りする楽しさ 使いやすさを追求すると 結局、すべてが手作りに

高村精一 (Takamura seiichi)
1943(昭和18年)東京生まれ。中学時代にサイクリングに魅了され、独協高校入学と同時に競技活動を開始。高校関東自転車競技選手権大会2連勝。1961年、日本大学入学。在学中には、全日本学校対抗選手権大会スプリント部門優勝、国体400メートル速度競争優勝など、スプリンターとして華やかな成績を残す。将来は競輪選手として嘱望されるが「サイクリングを楽しみたい」との思いから、大学卒業後は家業の精密機械加工業を継ぎ、1974年に「プロショップ・タカムラ製作所」の前身、タカムラサイクルを開業。1977年から、ラバネロブランドの自転車フレーム制作を開始。1980年にはモスクワオリンピックの日本代表選手選考会で優勝者がラバネロを駆り、注目を浴びる。日本オリンピック委員会の強化スタッフ・スポーツコーチやパラリンピックのコーチを歴任し、選手の育成にも力を入れる。日本サイクルスポーツ協会理事長。

※人類が2つの車輪を使った馬車を発明したのは、紀元前3500年頃。その後、自転車発明者については諸説あるが、カール・フォン・ドライスというドイツ人説が有力で1817年、彼はパリのルクサンブル公園で足蹴り自転車を公開し、フランスの特許を取得した。彼が作ったドライジーネは、ペダルもクランクもない自分の足で地面を蹴って前進する乗り物で、総重量は約22.5キロ。それでも、時速15キロで走る乗り物の出現は人々を歓喜させたという。

習スペースを設け、子供たちに開放している。レーサーとして、職人として、また指導者として、常に自転車と関わってきた高村さん。
「夢？ そうだなあ、職人としてもコーチとしても、生涯現役を続けることですね」
バーナーを手にする高村さんの瞳が少年のように輝いた。



炎の色で、強度をはかり
手の感触で、曲げていく

ていった。高村さんがフレームとして主に扱うのが、クロモリという素材だ。
「競技の世界ではカーボンが人気だけど、僕に言わせれば『軽ければ走るのか？』ということ。たしかにゼロから走るときは、軽い方が有利だけど、ある程度スピードに乗ってからは、コーナリング性能は変わらないはず」という。
フレーム用のパイプを繋ぐ工程では「ラグ」と呼ばれる継ぎ手を差し込み、溶かした真ちゅうをロー付けして接合する。真ちゅうは接着力が強く、融点が低いので高熱で加工しなくても済むため、パイプの強度を損なうことがない。とはいえ、むろん手作業のため、一瞬たりとも気を抜くことが出来ない。
さらに、高村さんがこだわるのが、フロントフォークの曲がりが、フロントフォークの曲がりだ。
「僕のフォークの特徴は、上のほうからアールがきれいに放物線を描いて曲がっていること。いろいろ試してようやく納得する形を見つけた。結局、治具も全部自分で作っちゃったんですよ」
高村さんは、治具にフォークを2本同時に差し込み、テコの

原理を利用しながら自身の感覚だけで曲げていく。経験がモノをいう職人ならではの作業だ。
そんな高村さんが求める理想的なフレームは、
「電動アシストってあるでしょ。あれほどじゃないにしろ、踏みこんだときに後ろから誰かが押してくれるようなペダリングが出来るフレーム。それが僕の求めるフレームなんです」

フレームビルダーの名匠である高村さんにはもうひとつ、クラブチーム『パールイズミ・スミタ・ラバネロ』の監督兼コーチとしての顔がある。高村さんは、ショップ開業と同時に、「正しい乗り方を教えたい」との思いから、「タカムラサイクルチーム」を発足。後進としての「チームラバネロ」には現在130名ほどのクラブ会員が在籍しているが、
「自転車競技の強豪国に比べ、日本は子供の頃のトレーニングが不十分。子供たちにはまず基礎体力の大切さを知ってもらいたいですね」
そんな思いから自宅の庭に練

速く走れたよ
そのことばを聞くのが
うれしい